

「共におられる」

最初から若者言葉で恐縮ですが、「クリぼっち」という言葉があります。「クリぼっち」ちゃんとパソコンの文字変換でも出てきました。そこそこ市民権のある言葉なのかも知れません。「クリぼっち」とは、「クリスマスに独りぼっち」という言葉を短縮したものです。12月24日、25日をひとり孤独に過ごす自分を自ら笑ったり、あるいは、他の誰かがひとり孤独であることを揶揄ったりする、そんな文脈で使われる言葉です。あまり良い言葉ではありませんね。

ただ、日本人キリスト者として思うのは、そういうキリスト教のクリスマスを前提とした新しい言葉が創出され、若者の間で流布している、という現状、これは悪くないなと思います。「除夜の鐘ぼっち」とか「初詣ぼっち」とか言いませんよね。神道や仏教には少々遠慮もありますが、何故かしら、クリスマスは「誰かと一緒にいる」ということが大前提となっていて、それが宗教的な文脈を抜きにして世間一般に広く浸透している。最初のクリスマスの情景や、聖書の言葉を知らずしても、「共にいる」ということが、何故かしら多くのところで求められ、望まれている。そんな日本のクリスマスにおける実情というのは、まるで御言葉がすでに社会の隅々にまで行き渡っているかのような、大宣教命令の成就を彷彿させつつ、きっと今年も続いていくのだろうなと思います。

「御子の御降誕をお祝いしないクリスマスは偽物だ」と、今も昔もキリスト教は発信してきました。きっと今日の礼拝でも、どこかの教会では、そういうメッセージを語っているかも知れません。もちろん、牧師になるくらいにキリスト教が好きな私は、「本当のクリスマス」を伝えてゆきたいと切実に願っています。「御降誕」というキーワードが含まれないクリスマスを完璧とは思いません。でも、その一方で、今までの教会の努力とは全く関係のない、商業的な、イベント的なところでクリスマスが日本社会に浸透し、受容されてきたことは、これは「全ての人を愛する」という神様の御心だったんじゃないかと思います。ただでさえ忙しい年末年始です。にも拘わらず、お寺の除夜の鐘を聴き、神社の境内でお賽錢を捧げる日本社会に、さらに加えて「クリスマス」を持ち込んだのは、他ならぬ神様なんじゃないかと。日本のキリスト者たちが、本当のクリスマスを願い求める中で、神様の方が、楽しくて、幸せなクリスマスを、この日本に根付かせてくださった。そういう考え方も、あながち間違いではないと、そう思います。

神様は、私たちの日常の過ごし方、慣れ親しんだ習慣、培ってきた経験則、考え抜いた思想信条など、つまり、信仰や信念や確信など、各人各様のグラデーション豊かな「生き方」を、軽く超越していく方なんだろうな、と思います。「キミの考え方、生き方は知っているよ、でも、お節介かも知れないけど、一緒にいたいんだ、共にいたいんだ」と寄り添う方なんだろうな、と。「神は我々と共におられる」という意味の通り、こっちがいて欲しいとか、いてくれたらいいとか、そういう事情を勘案することなく、ほぼ強制的に「共におられる」ことを望まれている。

考えてみれば、宗教の言葉は、いつも「ほぼ強制的に」という雰囲気があるから、敬遠されるのかも知れません。最初のクリスマスの時。イエス様のお母さんであるマリアさんにとっても、お父さんであるヨセフさんにとっても、天使が伝えた神様の言葉は強制的でした。有無を言わさず、拒否権を持たさず。その言葉を疑ったり、否定したりすること、それ自体が悪と見做されるような、そういう余白と遊びのない雰囲気がそこにはあったかと思います。「これを信じなければダメだ」という雰囲気が、確かにあるかも知れません。

ただ、それでも思うのは、「命令して、指示だけ出して、あとは自分で何とかせい」じゃなくて「一緒にいるよ」って言ってもらえるのは、なんかちょっと有り難いな、って思います。世の中、生きていて、金にもならない責任と苦労を、それでも一緒に背負ってくれる人って、なかなか会えるものじゃありません。もし、そんな人がいてくれるなら、それは親しい友人とか、本気の恋人とか、人生の伴侶とか呼べるような人でしょう。とりあえず、何か大きな責任を背負う、あるいは生きること自体から逃れられない、そんな自分が決して孤独では無く、誰かが一緒にいてくれる、というなら、それは有り難いし、嬉しいことだと言えます。

しかし、その上で、です。誰かが一緒にいてくれるとした上で、じゃあ、ただ一緒にいられれば、それだけで嬉しいか、と言わると・・・。誰が毎日の食事を作るの、とか、お洗濯は誰がするのとか、誰がゴミ出しするのとか。えっなんで、あなたはしないの、とか、これって私の仕事なの、とか。結局、そういう「一緒にいること」以上の、協働や分業の必要性が出てくるのは、まあ、仕方のないことです。これは家庭だと良くあることですし、職場でもそうだし、友人関係でもそうだし、教会でもそうですよね。「私はあなたと一緒にいるよ・・・、じゃ、あとは全部よろしくね」では、持続可能な関係性は成り立ちません。

そして多分、それは神様との関係においても一緒です。「神は我々と共におられる」。その宣言、

その標語、その実感の伴わない言葉だけでは、私たちの疲れと、悩みは、多分癒されません。言葉だけじゃなくて「実際、本当にそうだよね」という実感と、「神様がいるから助かったよ」という実体験が、やっぱり欲しいですよね。いくら不信仰と責められても、いくら見えないものを信じろと咎められても。許されるなら、本当に神様の温かな愛と恵みを感じてみたい。それを感じた上で、信じてみたい。宣べ伝えていきたい。神様との持続可能な関係性を持つだけの恵みと幸せを受け取ってみたい・・・、見えないものを信じる「信仰」においても、心を潤し、励ます「実感」の大切さは変わりません。

その人間存在の根本を自覚しつつ、受け止めてみたいと思います、クリスマスの出来事です。御子イエス様の、お母さん、お父さんになった、マリアさんとヨセフさんは、最初、心配しきりだったことでしょう。天使が急に現れたかと思えば、驚きと祝福の言葉だけ残して去って行った。「言葉として伝えられただけ」で実感の沸かない、信じ切ることのできない、まして喜ぶことなんてできるはずもない、まさに夢物語のような展開だったことでしょう。でも、その「言葉として伝えられただけ」の出来事は、「身に覚えのない妊娠出産」として、逃れられない「育児」として現実のこととなり、母として、父として経験することを余儀なくされていきます。

でも、そこには、結果的に喜びもありました。「結果的に」と言ったのは、現代日本で全ての妊娠出産が、必ずしも喜びになることはない、と弁えていたいからです。女性にとっても、男性にとっても「子を授かる」ことが無条件に幸せであると、思考停止して受け止めたくはありません。あくまで、このクリスマスの出来事は、マリアさんとヨセフさんの間で起こった、両者互いの覚悟と信仰によって結果的に喜ばしい奇跡となった、ということです。しかし、それでも、この夫婦の間において、支え合うことの温かみがあり、今回触れられてはいませんが、マリアさんの従妹であるエリザベトさんの寄り添いと祝福があり。満室だったけど心碎いて馬小屋を整えた宿屋の親切があり、お祝いするために駆け付けた羊飼いさん達があり、貴い3つの捧げものを携え来訪した博士たちがあり。ということは決して、悩んで孤独ではない、苦しんで我慢ではない、強いられて恐縮ではない。みながみな、立場や境遇は違えど、安心と喜びと、そして、未来への希望を見出すような、そんな出来事だったのではないか、と想像します。最初のクリスマスとは、それぞれ違う事情を抱えた人達が、天使や星に導かれ、馬小屋に集合して、嬉しい希望に出会ったというお話なんですね。

今年、初めて協力依頼があり、敦賀駅前のイベントでキャロリングを行いますが、そのイベントの広告には、「クリスマスデート」「夜デート」「ナイトスポット」という言葉が書かれています。… イエス様の御降誕をお伝えする場所が「ナイトスポット」かあ、と思うと、まあ、違和感もありますが。でも、「ナイトスポット」という言葉も解釈次第で、「夜に、輝く光に照らされた場所」という点では、月の光や星の光に照らされることと同じだし、イルミネーションの光もそうだよね、って個人的には考えています。ここに灯る蝋燭の光も、2000 年前に比べると十分に文明の利器です。当時は、油を使った煙の多いランプが主流でした。そこから考えると、イルミネーションという電気の光も神様は御理解くださるでしょう。そんな屁理屈も捏ねながら、でも、「共におられる」という最初のクリスマスの約束を、敦賀の街に、色々な事情を抱えた現代人に、どうにか伝えることが出来ればと願っています。そして、マリアさんとヨセフさんが、幼子を抱きかかえて「本当に神様はいるね」って。「神様の御言葉は嘘じゃないね」って実感できたように、今年のクリスマスを過ごす中で、私たちの間にも、「やっぱり神様っているんだね」って思えるような、そんな幸せな瞬間が訪れるようにと、心から願っています。クリスマスまであと 1 週間と少し。これからさらに慌ただしく、大変なこともあるでしょうけれど、なお喜びと祝福に満たされたクリスマスを迎えると信じて。神様が共にいて恵みで満たしてくださると期待して、新しい 1 週間の歩みを踏み出して参りたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちを、この礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたは、私たちの救いのためには御子イエス様をくださり、そして、年の瀬迫るひと時を特別な祝祭に変えてくださいました。あなたの愛は、すでにクリスマスの喜びという形で、この世に実現しているのだと思います。どうか、そのクリスマスの喜びが、寂しさを憶え、苦しみの中にいる全ての人たちを包み込んで、期待と希望に満たされた明日へと繋いでくださいますように。御子がお生まれになったという出来事が夢物語や、ただの信仰の話ではなく、今日を生きる私たちを励まし、力づける出来事として実感することができますように。どうか、あなたが温かな御心を示していてください。

このお祈りを、大切なイエス様の御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。